

## 追悼の言葉

本日ここに、ご来賓のご臨席を賜り、多くの遺族の参列のもとに「埼玉県戦没者追悼式」が厳粛に挙行されるにあたり、戦没者遺族を代表し謹んで追悼の言葉を申し上げます。

先の大戦が終結し七十九年の歳月が流れました。戦後日本は平和を希求し、一度たりとも戦火を交えることはなく、国家の平安と家族の幸せを念じつつ、散華された戦没者の尊い犠牲の上に築かれた平和と自由を享受しております。

我が国でも経済や国民の生活に多大な影響を与えた新型コロナウイルス感染症も落ち着きを取り戻し、働き方や暮らし方も大きく変化しましたが、隣国等による度重なる領海・領空侵犯など多くの難問を抱えております。

国外ではロシアの侵略から二年半が経過したウクライナや、長年の対立が続くイスラエルとハマスの紛争もイランやレバノン、イエメン等が加わり、今やイスラエルとパレスチナの争いに拡大しております。更にスーダンやイエメンの内戦等今この時も多くの命が不当に奪われております。又、北朝鮮は国連の非難決議を無視し、軍事能力を高めながらミサイルを頻繁に発射し、諸外国に脅威を与えております。

世界の英知を結集し、一日も早く暴挙の停止と平和が訪れることを願うばかりです。

私は昭和一六年一月に生まれ、その年の十二月大東亜戦争が始まり、時を同じくし父は出征し、二十年一月硫黄島で戦死しました。

私は二歳で、弟は一歳でしたので、父との思い出は全くありません。私達家族は当時東京都の台東区に居住していたため、二十年三月の東京大空襲で焼け出され、母の故郷であった志木市での生活が始まりました。戦後の物資の乏しい中、二人の子供を育てるためにいつ寝たのかわからないほど働き、一度も弱音を吐かず、息子が世間から後ろ指を指されないように厳しく育てられました。私達兄弟も食事の支度や新聞配達などをし、生計を手伝いました。

ご遺骨が荒野や豪の中に眠ったままの硫黄島の遺骨収集にも参加しました。壕の中は硫黄のガスが充満し五十度にもなる灼熱地獄です。この劣悪な環境の中で雨水だけで耐え、戦い散っていったご英霊を一日も早く故郷に帰還させねばと、任務を遂行いたしました。この年になるまで一度も呼べなかった「お父さん」と島のどこかに眠る父に呼びかけることが出来ました。

戦後世代が九割を超え、戦争の記憶が歴史の流れに埋没する中、今日の平和の陰に幾多のご英霊があり、その尊い礎の

上に今日の我が国が、私達が在ることを片時も忘れてはおりません。

肉身を失った私達遺族は残された者の責務として英霊の顕彰をはじめ、国家の繁栄、心豊かに暮らせる社会、そしてご英霊が何より願われた世界の恒久平和実現のために、戦争の悲惨さ、平和の尊さ、戦争の教訓を後継者である皆様の孫・ひ孫からなる青年部とともに、次世代に語り継ぐ「平和の語り部」活動に、より一層力を入れて取り組んでおります。本日の追悼式の開催にあたり、ご尽力をいただきました関係の皆様へ遺族を代表し心からの感謝と御礼を申し上げます。

結びに、ご英霊のご冥福とご参列皆様のご健勝とご多幸を祈念申し上げまして、追悼の言葉といたします。

令和六年十月二十六日

埼玉県戦没者遺族代表 福居 一夫